

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：42639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03084

研究課題名(和文) 対人特性次元の分析と応用可能性の検討

研究課題名(英文) Analysis of interpersonal traits dimensions and potential applications

研究代表者

橋本 泰央 (Hashimoto, Yasuhiro)

帝京短期大学・帝京短期大学・准教授

研究者番号：50748267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：他者との接し方はさまざまあるが、パーソナリティの観点からは、他者に対する親密さが高いか低いか、支配的態度が強いが弱いかによって分類できると考えられている。このたびの研究では、パーソナリティを表現する用語を利用して、日本人が他者と接する際のパーソナリティはどのように整理できるのかを検討し、他の心理尺度との関連からその特徴を検討した。結果は次の通りである。第1に、親密性・支配性と解釈可能な2つの直交軸が見出され、対人特性語の円環構造が確認された。第2に、対人特性語は8つのクラスターに分類可能であった。第3に、クラスターの配置に先行研究との違いが観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、欧米を中心とした海外の研究で明らかにされていた、他者と接する際のパーソナリティ分類の次元である親密性と支配性の2次元が日本においても確認された点で意義がある。言語も文化も異なる国々で共通する次元が見出されたことから、他者と接する際にヒトがとる態度を共通して捉える物差しがあることを裏付ける研究と言える。一方で、本研究でみられた先行研究との違いは、親密性や支配性が意味する内容が文化によっても異なることを示唆している。パーソナリティを表現した用語を通じた文化比較を可能にするという点でも意義のある研究と考える。

研究成果の概要(英文)：There are various ways of interacting with others, but from the perspective of personality, it is thought that they can be classified according to whether they are more or less intimate with others and whether they have a strong or weak dominant attitude toward them. In this study, we examined how Japanese people's personalities can be categorized in terms of their interactions with others, using terms that express personality, and examined the characteristics of these personalities in relation to other psychological scales. The results are as follows. First, two orthogonal axes were found that could be interpreted as intimacy and dominance, confirming the circular structure of interpersonal characteristic terms. Second, interpersonal characteristic words could be classified into eight clusters. Third, we observed differences in the arrangement of the clusters compared to previous studies.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：対人特性 パーソナリティ 親密性 支配性 対人円環

1. 研究開始当初の背景

パーソナリティの中でも対人行動に関係する側面を特に対人特性という。対人行動と対人特性はともに、親密性(親密対冷淡)と支配性(支配対服従)という直交する2次元で表現できると考えられてきた(Wiggins, 1979)。この2次元は心理療法患者の観察(Leary, 1957; Lorr & McNair, 1963)や子どもに対する母親の行動の観察(Schaefer, 1959)、子どもの行動(Becker & Krug, 1964)といった対人行動を表したモデルや、対人特性を表すモデル(Wiggins, 1979)で繰り返し見出されてきた。これらのモデルは親密性と支配性という直交する2軸の周りに対人行動や対人特性の領域を配置した円環モデルによって表現されている。

対人特性を構成する親密性と支配性という2軸は、対人特性を表す用語(以下、対人特性語)を用いた研究によっても見出されている(たとえば Rosén, 1992)。対人特性語を対象とした研究は各言語に埋め込まれた、その言語特有の構造を内部から捉える emic な視点に立つ研究といえる。

対人特性は対人行動の特徴や対人関係のあり方の指標として活用され、法則定立的ネットワークとして心理学的構成概念同士の整理に役立っている。また外的基準の1つとして理論研究にも利用されており、人間の行動を記述し、理解するための1つの概念として活用されている。しかし、日本においては対人特性の研究自体が少なく、日本人の対人特性を包括的に捉えようとした試みもほとんど行われていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本人の対人特性を日本語に基づいて構造化し、その特徴を明らかにすることとした。

3. 研究の方法

本研究は質問紙法を用いて行われた。各研究への参加者の情報は各研究の説明内に記載する。

4. 研究成果

(1) 対人特性語の構造の検討

日本の社会や文化を反映した対人行動の特徴や対人関係のあり方を知るためには、日本語の対人特性語に基づいて、対人特性の基本的次元を明らかにする必要があると考えられた。そのため、橋本(2018)で抽出された対人特性語を利用して調査を行った。同時に、マーカーとして対人特性を測定するための IPIP-IPC-J(橋本・小塩, 2016)への回答を求めた。

調査参加者は大学生(男性339名、女性449名、不明4名)で、平均年齢は19.1歳(SD=1.2)であった。調査対象となった語彙数は339語であった。参加者には各対人特性語が他者と接する際の自分を表現する言葉として当てはまるかどうかを「ハイ(1点)」「イエエ(0点)」の2件法で回答を求めた。各対人特性語に対して「ハイ」と回答された割合(是認率)が.75より高い10語と.25より低い70語を除外し、残った259語のテトラコリック相関行列をもとに主成分分析を行った。第2主成分までの累積寄与率は70.1%(43.8%+26.3%)であった。第1主成分と第2主成分とで構成される2次元平面上での対人特性語の配置を示す(Figure 1)。

Figure 1の は、パーソナリティの特性語から Big Five の抽出を試みた先行研究(Isaka, 1992; 柏木・辻・藤島・山田, 2005; 村上, 2003; 和田, 1996)で外向性に分類された語、 は外向性の対極語を表す。 は、同じく協調性に分類された語で、 は協調性の対極語として分類された語である。

IPIP-IPC-Jの親密性と支配性の得点を一緒に主成分分析を行うと、親密性は7度、支配性は-75度の位置に布置された(*印)。その周囲に布置された語彙から、角位置7度と中心を挟んだ対極をつなぐ軸は親密性(「素直」「理解のある」「協調的」対「素っ気ない」「否定的」「疑り深い」など)と解釈された。同じく、-75度付近とその対極をつなぐ軸は支配性(「立ち向かう」「勝ち気」対「遠慮深い」「下手に出る」「控え目」など)と解釈された。

以上のことから、日本語の対人特性語においても支配性、親密性と解釈可能な、ほぼ直交する2軸が見出された。対人特性語の円環構造が見出された先行研究はいずれもインド・ヨーロッパ語族の言語を対象としていた(De Raad, 1995; Di Blas & Forzi, 1998; Rosén, 1992 参照)。語族の異なる日本語を対象とした研究で類似した2軸と円環構造が見出されたことは、支配性

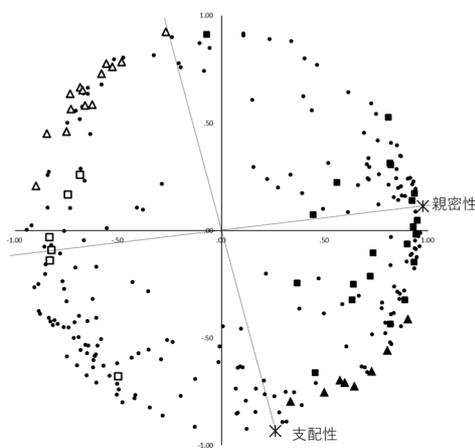


Figure 1 対人特性語の配置

と親密性という対人特性の捉え方、および対人特性の円環構造の言語を越えた普遍性を示唆していると考えられる。

(2) 対人特性語のクラスター分析

Figure 1 で示した対人特性語のグルーピングを目的としてクラスター分析を行った。第 3 主成分までの累積寄与率が 77.2% あったことを考慮し、第 3 主成分までの負荷量をもとにクラスター分析を行った。最適のクラスター数を Gap 統計量 (Tibshirani, Walther, & Hastie, 2001) にて決定し、k-means 法を用いた。Gap 統計量では 8 クラスターが推奨された。クラスター数を 8 に指定して k-means 法を実施したところ、259 の対人特性語は、分布と密度を異にする 8 つのクラスターに分割された (Figure 2)。各クラスターに含まれる対人特性語は Table 1 の通りであった。円の中心を挟んだ対極に位置するクラスターには、それぞれ対極の意味合いの語彙が含まれていた。

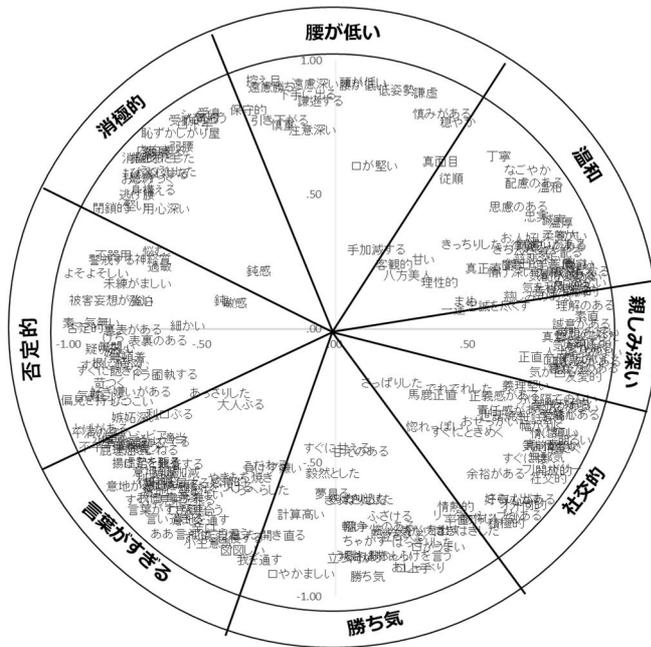


Figure 2 対人特性語のクラスター

Table 1 各クラスターに含まれる主な対人特性語

cluster 3 (腰が低い)	cluster 4 (消極的)	cluster 1 (否定的)	cluster 6 (言葉がすぎる)
控え目	消極的	偏見を持った	不満の多い
謙虚	閉鎖的	否定的	とげがある
遠慮勝ち	受動的	気難しい	意地が悪い
頭が低い	内向き	素っ気無い	言葉がすぎる
低姿勢	シャイ	よそよそしい	我儘
遠慮深い	受身	苛つく	言い過ぎる
腰が低い	弱気	不器用	小生意気
穏やか	口下手	警戒する	偏屈
慎みがある	恥ずかしがり屋	すぐに飽きる	嘘つき
下手に出る	話し下手	疑り深い	不平不満を言う
⇕	⇕	⇕	⇕
cluster 2 (勝ち気)	cluster 7 (社会的)	cluster 5 (親しみ深い)	cluster 8 (温和)
おしゃべり	明るい	親しみ深い	温和
口上手	外向的	愛がある	温厚
勝ち気	社交的	暖かい	なごやか
口やかましい	開放的	親しみがある	柔らかい
我を通す	気さく	にこにこした	配慮のある
はきはきした	フレンドリー	親切	誠実
口がうまい	積極的	友愛的	気を配る
おちゃらけを言う	オープン	素直	丁寧
馴れ馴れしい	好奇心がある	心の広い	気遣いがある
はっきりした	愛嬌がある	人当たりのよい	善良

(3) 対人特性とビッグ・ファイブ尺度, 既存の対人特性尺度, ダーク・トライアド尺度, 対人葛藤尺度との関連

上記で抽出した対人特性クラスターとパーソナリティ, および対人葛藤方略との関連を検討するために心理学の講義を受講する東京都内の大学生 240 名 (男性 91 名, 女性 149 名, 平均年齢 18.8 歳, SD=0.91) を対象に調査を行った。259 の対人特性語を 7 クラスター, 8 クラスターにまとめた際に, 各クラスターでベクトル長の長かった 10 語ずつを抽出し, 重複を除く 88 語を分析対象とした。

使用した尺度は以下の通りであった。

The Japanese Version of Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) ビッグ・ファイブの測定には日本語版 TIPI-J (小塩・阿部・カトローニ, 2012) を使用した。回答は「全く違う (1 点)」から「強くそう思う (7 点)」までの 7 件法で求めた。本研究における各下位尺度項目間の相関は外向性: $r = -.53$, 協調性: $r = -.25$, 勤勉性: $r = -.31$, 神経症傾向: $r = -.38$, 開放性: $r = -.15$ であった。

日本語版 International Personality Item Pool-Interpersonal Circumplex (IPIP-IPC-J) 対人特性の測定には日本語版 IPIP-IPC-J (橋本・小塩, 2016) を使用した。「自信過剰」, 「傲慢」, 「冷淡」, 「孤独」, 「自信のない」, 「謙虚」, 「温和」, 「群居的」の 8 次元を各 4 項目, 合計 32 項目で測定する尺度である。回答は「全くあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (5 点)」の 5 件法で求めた。本研究における各下位尺度, および親密性と支配性の内的整合性は自信過剰: $= .81$, 傲慢: $= .82$, 冷淡: $= .72$, 孤独: $= .64$, 自信のない: $= .67$, 謙虚: $= .44$, 温和: $= .65$, 群居的: $= .82$, 親密性: $= .88$, 支配性: $= .88$ であった。

日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) Dark Triad の測定には日本語版 DTDD (田村・小塩・田中・増井・ジョナソン, 2015) を使用した。各下位尺度の内的整合性はマキャベリアリズム: $= .73$, サイコパシー傾向: $= .58$, 自己愛傾向: $= .79$ であった。

対人葛藤方略スタイル尺度 対人葛藤方略スタイルの測定には加藤 (2003) の対人葛藤方略スタイル尺度を使用した。確認的因子分析を行うと適合度がやや低く ($CFI = .800$, $RMSEA = .097$ [$.083 - .111$]), 相互妥協スタイルの内的整合性も低めであったため ($= .54$), 改めて因子分析を行い, 平行分析により 4 因子を選択した。因子負荷量が .30 に満たなかった項目と 2 つの因子に負荷した項目を除外し, 再び因子分析を行い, 相互妥協スタイルを除く 4 方略を分析に用いた。

Table 2 には各クラスターとパーソナリティ尺度, 対人葛藤方略との相関を示した。相関より, クラスター 5 は温和な対人特性, クラスター 1 は友好的な対人特性, クラスター 4 は社会的な対人特性, クラスター 2 は自己主張的な対人特性, クラスター 6 は自己中心的対人特性, クラスター 7 は冷淡な対人特性, クラスター 3 は内向的・受身な対人特性, クラスター 8 は謙虚な対人特性を表すと考えられた。

88 語を主成分分析すると, 寄与率は第 1 主成分から順に 48.4%, 27.8%, 2.0%, 1.2%... であり, 第 2 主成分までの累積寄与率は 76.3% であった。第 1・2 主成分に対する負荷量をもとに Gap 統計量を計算すると 8 因子が推奨された。K-means 法にてクラスター分析を行い, 各クラスターの平均値をもとに主成分分析を行った。第 1・2 主成分平面上における 8 クラスターの布置は Figure 3 の通りであった。

Table 2 8 クラスターとの相関

	clus5	clus1	clus4	clus2	clus6	clus7	clus3	clus8
TIPI-J								
外向性 (E)	.17	.48 **	.79 **	.70 **	.14	-.27 **	-.72 **	-.39 **
協調性 (A)	.71 **	.54 **	.34 **	-.02	-.43 **	-.48 **	-.04	.34 **
勤勉性 (C)	.21 *	.16	.22 *	.09	-.31 **	-.27 **	-.33 **	.06
神経症傾向 (N)	-.09	-.05	-.14	-.14	.13	.15	.16	.01
開放性 (O)	.22 *	.18 *	.20 *	.22 *	.12	-.01	-.15	.03
IPIP-IPC-J								
自信過剰 (PA)	.16	.37 **	.53 **	.63 **	.32 **	.05	-.34 **	-.08
傲慢 (BC)	-.36 **	-.17	-.03	.31 **	.63 **	.56 **	.08	-.22 *
冷淡 (DE)	-.38 **	-.40 **	-.26 **	.10	.36 **	.56 **	.24 **	.03
孤独 (FG)	-.33 **	-.49 **	-.71 **	-.53 **	.08	.41 **	.68 **	.25 **
自信のない (HI)	.09	-.14	-.44 **	-.51 **	-.27 **	.08	.48 **	.42 **
謙虚 (JK)	.47 **	.47 **	.24 **	.02	-.37 **	-.37 **	.03	.22 *
温和 (LM)	.72 **	.65 **	.46 **	.18	-.36 **	-.50 **	-.12	.27 **
群居的 (NO)	.33 **	.47 **	.71 **	.56 **	-.03	-.39 **	-.56 **	-.12
親密性	.67 **	.67 **	.59 **	.20 *	-.47 **	-.71 **	-.39 **	.09
支配性	-.01	.24 **	.58 **	.69 **	.40 **	.02	-.54 **	-.35 **
対人葛藤方略								
統合	.25 **	.26 **	.16	-.11	-.16	-.17	.06	.10
回避	.38 **	.19 *	-.10	-.33 **	-.22 *	-.21 *	.36 **	.31 **
強制	-.30 **	-.08	.20 *	.36 **	.54 **	.36 **	-.14	-.41 **
譲歩	.29 **	.08	-.12	-.22 *	-.15	-.17	.28 **	.26 **
妥協	.22 *	.18	.15	-.09	-.09	.01	.06	.15
DTDD-J								
マキャベリアリズム	-.22 *	-.11	.15	.34 **	.51 **	.38 **	-.16	-.34 **
サイコパシー傾向	-.44 **	-.44 **	-.26 **	-.02	.35 **	.54 **	.16	-.13
自己愛傾向	.02	.17	.23 *	.28 **	.36 **	.17	-.15	-.28 **
Dark Triad	-.30 **	-.17	.08	.30 **	.58 **	.52 **	-.08	-.37 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

(4) 日本語の対人特性語の構造の特徴

日本語の対人特性語の構造には、先行研究とは異なる点が見受けられた。1つ目の特徴は支配性を表す軸上に「自己主張的」対人特性が配置されたこと、2つ目の特徴は、先行研究で見出されている服従的対人特性が独立したまとまりを作らず、内向的対人特性と1つにまとまって「内向的・受身」な対人特性を形成したこと、そして3つ目の特徴は先行研究の「温和」な対人特性が「温和」な対人特性と「友好的」対人特性とに分かれたことであった。

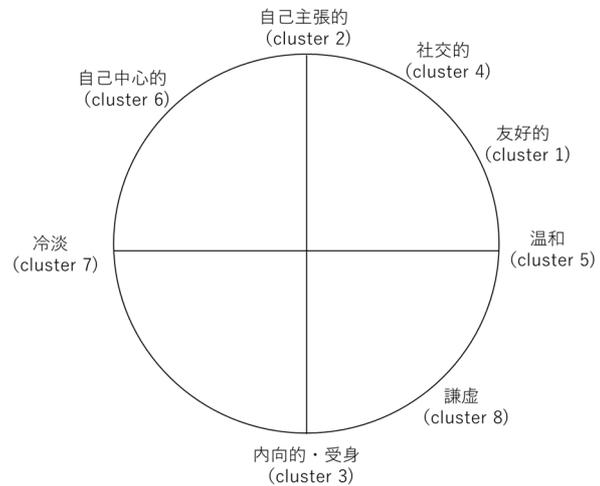


Figure 3 日本語の対人特性語の円環構造

<引用文献>

- Becker, W. C., & Krug, R. S. (1964). A circumplex model for social behavior in children. *Child Development*, 35, 371-396.
- De Raad, B. (1995). The psycholinguistic approach to the structure of interpersonal traits. *European Journal of Personality*, 9, 89-102.
- Di Blas, L., & Forzi, M. (1998). The circumplex model for interpersonal trait adjectives in Italian. *Personality and Individual Differences*, 24, 47-57.
- 橋本泰央 (2018). 辞書的アプローチによる対人特性語の選定. 早稲田大学文学研究科紀要第63輯. Retrieved from
- 橋本泰央・小塩真司(2016). IPCに基づいた IPIP-IPC-J の作成. *心理学研究*, 87, 395-404.
- Isaka H. (1992). A study on the structure of conceptual representations of trait terms in everyday Japanese language. *Japanese Psychological Research*, 34, 77-88.
- 柏木繁男・辻平治郎・藤島寛・山田尚子 (2005). 性格特性の語彙的研究 LEX400 のビッグファイブの評価. *心理学研究*, 76, 368-374.
- 加藤司(2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について. *社会心理学研究*, 18, 78-88.
- Leary, T. (1957). *Interpersonal diagnosis of personality: A functional theory and methodology for personality evaluation*. New York, US: Ronald Press.
- Lorr, M., & McNair, D. M. (1963). An interpersonal behavior circle. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 68-75.
- 村上宣寛(2003). 日本語におけるビッグ・ファイブとその心理測定的条件. *性格心理学研究*, 11, 70-85.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ, ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 21, 40-52.
- Rosén, A. S. (1992). The circle as a model for the interpersonal domain of Swedish trait terms. *European Journal of Personality*, 6, 283-299.
- Schaefer, E. S. (1959). A circumplex model for maternal behavior. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 226-235.
- 田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソン, ピーター カール (2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 24, 26-37.
- Tibshirani, R., Walther, G., & Hastie, T. (2001). Estimating the number of clusters in a data set via the gap statistic. *Journal of the Royal Statistical Society: Series B (Statistical Methodology)*, 63, 411-423.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. *心理学研究*, 67, 61-67.
- Wiggins, J. S. (1979). A psychological taxonomy of trait-descriptive terms: The interpersonal domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 395-412.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋本泰央・小塩真司	4. 巻 -
2. 論文標題 パーソナリティ特性語の望ましさの時代変化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本泰央・小塩真司	4. 巻 28
2. 論文標題 辞書研究に基づく対人特性語の構造の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 16-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2132/personality.28.1.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 橋本泰央・小塩真司
2. 発表標題 母親の養育スタイルと対人特性
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会（Web開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本泰央・小塩真司
2. 発表標題 パーソナリティ特性の望ましさは時代と年齢によって変化するか 青木（1971）との比較
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第30回大会（Web開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本泰央
2. 発表標題 語彙研究による対人特性の構造の研究
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hashimoto Y., Oshio A
2. 発表標題 Cross-sectional Study about Development of Interpersonal Traits
3. 学会等名 ISSID 2019 conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hashimoto Y., Oshio A
2. 発表標題 Circumplex structure of interpersonal trait words in Japanese language
3. 学会等名 3rd World Conference on Personality（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本泰央・小塩真司
2. 発表標題 対人特性と対人葛藤方略の関連
3. 学会等名 第60回社会心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本泰央・小塩真司
2. 発表標題 対人特性の構造分析 クラスタ分析による検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本泰央・小塩真司
2. 発表標題 対人特性は円環構造を示すか 語彙アプローチによる検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小塩 真司 (Oshio Atsushi) (60343654)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------